

ぶつけたのは、頭である。意識はあつた。検査でも異常はない。」だから、大丈夫」と言い切れるだろうか？

57歳のA子さん。雪道で滑って、お尻と後ろ頭をしたらま打った。意識はなくなっていない。でも、いつもの道を歩いて家に帰ったのだったが、記憶が定かではない。そして、帰宅しても、少なくとも1、2時間間は、様子がおかしかったらしい。冷蔵庫を開けたまま、ボーとしていたという。が、受け答えに間違いはなかった、と娘さんは言う。翌日には、軽い頭痛を訴えるだけで、意識障害も記憶障害もない。が、念のために、頭のMRI（磁気共鳴画像）の検査をした。頭の中には、Aさんが心配するような脳挫傷も血腫もみられない。病名は「脳振盪」である。と聞いたAさんと娘さん。「あーら、思ってたわ。今夜は祝辞^{うらなひ}おむね^{おむね}いさよこ^{いさよこ}。

が、ちょっと待って下さい。そういうわけにはいかない。確かに、脳振盪では、通常の検査で、出血などの外傷による脳の損傷はみられない。だが、Aさんは、頭を強く打った。軽いとはいえ、一時的に記憶

や判断の機能がおかしい状態になっていたではないか。

それは、医学的に、脳が衝撃を受けることによってある種の神経伝達物質が過剰に放出されるからだ、と説明されている。そして、その神経伝達物質の代謝が正常に戻るまで2〜6週間はかかるという報告もある。で、代謝の回復過程で繰り返し頭を打つと、より軽い衝撃でも脳震盪を起こしやすくなるし、症状も強くなる。慢性化すれば、認知症にもなりうるのだ。

ということでは、「脳振盪はバカにできない。少なくとも1か月は、また頭を打つようなことのないように」と言わなければならぬまい。が、Aさんだって、好きで頭を打つわけがない。蛇足だろうか。

（石黒修三＝いしほくろニック・脳神経

外科医…2/18北國新聞掲載）